

も呼んだかなと思つて玄關に出て見たが誰もいない。その時、すぐ博の声とそっくりだと母も立って、「博、博」と呼んだという。おどかすつもりで隠れているんじゃないかと玄關の外に出て、「博」と呼んで見たというのです。

思えば、あの山の中で息たえだえの粕谷を抱いて三十分付き添い、「お前の家は上藤崎だな」と幾度も幾度も聞いた。ただ首を縦に振って答えた。その時から私について私を守り通してくれたのだと今でも思っています。

私は、鈴成りのトマト畑に道案内してくれた白犬のことも、泉田源吉と出逢つたのも、皆粕谷の御霊のなしたものと思われてならない。

毎年、九月には彼の仏壇にお参りしている。公報で戦死を知らされた十九年六月と書いてある木の符には「粕谷博之霊位」とあるだけでした。

南方の船舶工兵、終戦後の重労働

広島県 山下 廣一

―山下さんは最初軍属で、後で広島船舶工兵として召集されたそうですが、何年徴集でしたか。

私は大正六年八月二十八日生まれなので、昭和十二年徴集兵です。召集前は軍属として、広島運輸部艇舟隊で上海へ、昭和十三年六月、呉第三船舶司令部勤務となり、各国船舶の航行監視を高い槽の上でしていた。英国の輸送船が何回上下したかなど各国別に記録をしていたのです。

八月ごろから蕪湖の艇舟隊分遣隊の雑務に従事していたが、九月三日、作業中左足関節骨折。陸軍病院から十月内地送還、大阪で入院治療したが、十四年二月ごろ解雇となり広島県深安郡の実家へ帰った。

同年五月一日、広島島の工兵第五連隊に臨時召集、八月骨折再発で歩行ができず、広島赤十字病院に入院、

憲らぬので十五年五月一日召集解除になりました。

—その後再召集は無かったのですか。

十八年五月一日、召集令状が来て、山口県柳井の船工兵第十連隊留守隊へ入隊しました。六月十日ごろ、柳井駅から釜山—山海関—南京—上海、第十連隊のある呉淞へ着いたのです。

十月、南方へ転進となり、スマトラのペラ湾に上陸し駐留したのです。その間マラッカ海峡に入ったばかりの時、艦載機の低空銃爆撃を受け、ペラ湾上陸寸前に輸送船（三百トンぐらいか）は座礁沈没したのですが、大発で荷を陸揚げしてもらった。

ペラ湾上陸以後、二月ごろだったか、季節の変化がないので三月ごろだったか、機材輸送のインド洋のニコバル島へ大発で行った。インド洋は波が高くて何とかなる。船酔いするようでは船舶工兵になれない。英潜水艦は出没したが船が小さいので銃撃を受けずにニコバルから帰った。

—南方はもう制空権も日本軍にはなく、とくにフィリピン戦が開始というので随分大変だったでしょ

う。

十九年七月ごろ、機材受領のためマニラの北、北サンフェルナンドの兵器分廠に行った。私は着いたばかりでマリアに患り、発熱入院したが、フィリピン山中のバギオへ送られ一カ月療養しました。他の者は資材を持って帰ったが、私は一カ月後に一人でサンフェルナンドから貨車の屋根に乗せてもらいマニラに向かった。

九月二十日前後、マニラから十キロ西のミカヤワンの駅でテロが乗り込んで、後部車両から火をつけられた。貨車には弾薬が積んであった。テロが挟撃作戦に出たわけで、カガヤワンで列車が切れ、荷物も人も落ちてしまった。

私の隣には赤羽工兵隊の富樫兵長が乗っていて、その膝にもたれていた時、弾丸が富樫兵長のスネを貫通し、私の顔をカスリ、鉄帽のひさしを貫通した。兵長は列車から河へ落ちたがその後行方不明となってしまった。

私たちは夜、河にひそんでいたが、機関車は後の車

両を切り離し帰ってしまった。残ったのは焼けただけだ。車両だけで、私等は食物も無く、バナナや芋で飢えをしのいだと記憶している。十時ごろ、マニラから救援列車が来た。

九月になるとレイテ作戦の最中で船はなしだったが、折良く内地から船が来て便乗。夕方五時ごろマニラを出た。まだコレヒドールのアンテナが見えるとき湾の入り口で敵潜水艦の雷撃を受けて、スクリューをやられた。丸二週間、浮いたまま潮に乗って流された。一週間ぐらいは食糧（乾燥焼めし）があった。

海軍の水上げ機が場所を確かめて来てくれていた。水上機が通信筒で「海防艦が曳航するのでサイゴンに入港されたし」とあった。艦に曳航してもらいサイゴンに上陸したが、十四日間ぐらいかかったような気がする。

サイゴンから鉄道でタイ、馬來半島と縦断してシンガポールによく着いた。船舶工兵第十連隊はシンガポールに戻って来ていた。私は暁第九四二二部隊宮城隊の「八隊」に所属し、これが最終的には昭南防衛

隊となり、西埠頭には第三船舶司令部があり、私はそこへも駐屯した。

私たちは大発（上陸用舟艇）を東埠頭に繋留。ボルネオのそばのリンタン島タンジシンウバン港に近衛歩兵部隊がいたので、兵員・機材輸送の任務についていた。大発で東埠頭から十二時間ぐらいかかった。

―終戦は何処で、何時ごろ知ったのですか。

二十年八月二十日までいたが終戦は知らなかった。

東埠頭で船から戻ったら連絡員が来て「軍装して第三船舶司令部へ来い」という。どういふことかと思つて行つた。（乗員、日本兵四人、インドネシア兵二人）気を付けをさせ詔書を聞けと行って、終戦詔書を読んだが、日本が負けるなど思つてもいなかったので、何のことが判らなかつた。

内地とかけ離れているので、シンガポールでは戦闘位置につけという。司令部から帰って出港。リンタン島へ行き、タンジジョンウバンからタンジジョンピナンへ向かった。ピナンからブクン島、プロプロ島（小さい島）へ立ち寄り、第三十八連隊（？）の兵を運ぼうと

した。

途中で、英国の海防艇に停船を命じられ、黄色い旗を立てて入港させられた。その時は空船だったが、武装解除するから全員下船して船を焼けという。デッキに重油を撒いて、豊一枚国旗の上に乗せて焼けという。私の指揮のもと、四人は敬礼し焼いた。その時は英兵の前で男泣きした。船が焼けるので下船したが、腹が煮えくり返るようだった。

私たち四人はロープでくくられて山の中へ連れて行かれた。連行中、私は発熱していたので後を歩いていたら英兵に銃剣で突かれて痛い。私は帯革で叩き、英兵に飛びかかったら、戦友三人が我慢せよと押さえられたので抵抗を止めた。血が流れるので乾兵長（高知県）が上衣を引き裂いて止血をしてくれた。山の中へ入り持ち物は全部取られた。それからが大ごとだった。

その後、英の海防艦へ連れてこられ、前甲板の上で数珠つなぎにつながれ、食事も丸々二日与えられない。甲板は暑いという、海水をホースで息も出来ぬぐらいかけられた。報復手段か、手を後に回されているか

ら動くことも出来ない。

二日目の夕方、シンガポールの東埠頭に上げられ、歩いて西埠頭の側の俘虜收容所（ケッペル作業隊）へ入れられて、戦後の処理をさせられた。英国軍の命令で、街の清掃、貨物の積荷、船からの港湾作業など、重労働をさせられた。一食ビスケット（直径四センチぐらい）二枚で三食のみ。

タバコは貰っても拾っても、吸ったら重営倉一カ月、屋外でバリケードで困っただけ、屋根なし。朝夕二回、二時間の駆け足。作業に行くくと、六畳ぐらいの石の上に我々を載せ、そこで石を叩かせる。これも報復か。翌日は、シンガポールのマンホールの中に入って紙拾い、汚物拾い、将校以下二千人、全員させられた、真裸（褌も取って）だが、兵舎に帰っても臭さが取れない。

広島の人間には氏名を書き出させた。目的は昭南神社の忠霊塔を壊す命令が出て、シンガポール攻略は広島第五師団なので、広島県人に対する報復だったのか。私は当時東京にいたので、第五師団のことは良く

知らなかった。

その他、半日は碎石、半日は醬油樽を頭にくくり、後向きに坂をかけ降ろさせる。そんな重労働が、昭和二十一年六月二十五日まで続いた。戦後そのために死んだ人がある。無茶して殺されたと同じである。

私たちは、二十一年六月三十日名古屋に上陸、復員したのである。戦後の俘虜に対する処置は、国により、時により、戦争国の人により、随分差のあることを知った。勝った者が、強い者が正しい、負けた者は賊軍なのだろうか。

アンボン、ケイ、セラム島 私の 体の戦後は終らない

福岡県 鳥井 督 三

―鳥井さんは技術系だったので船舶工兵になったのですか。また何年の徴集ですか。

私は大正七年五月生れですから、昭和十三年徴集兵

ですが、徴集を延期していたので、大東亜戦開戦早々の昭和十六年十二月十日に直接朝鮮の竜山に入営（門司集合し）したのです。

竜山の野砲連隊で教育を一年間ぐらい受けたが、部隊から二人だけ砲部隊（船舶隊）に転属して、横浜へ行つて上陸用船艇を作ったのです。百人ぐらい乗れるものをベニア板です。私は技術屋でも機械科出、部下は工作機械の職工だった人たちでした。船に接着剤を使うのだが、足りないので釘だけでベニア板を張る。ところが、釘と釘との間に水が入り沈んでしまう。今考えると、これでは勝てる筈がない。昭和十七年だったのに、もう物が不足していたのです。

四―五ヵ月後か、宇部で編成替えになり、昭和十八年一月か二月頃だったか、四隻の輸送船で出港、それには四―五隻の護衛艦がついて来た。フィリピンに着いたら護衛艦はほとんど引揚げた。マニラに半月ぐらいで、また四隻の船団を組んだが、その船は水を運ぶ船で、船倉が仕切っており、三、四発魚雷をくつても沈まないといっていました。